

## 書けない生徒と書ける生徒は何が違うのか

「スイミー」のあらすじ調査の分析から

## 一 研究の目的

本稿は、定時制高校と進学校の生徒の書いたあらすじを素材に、学習に困難を抱えている生徒とそうでない生徒の文章表現力の違いを明らかにして、文章表現指導の方法を模索することが目的である。

## 二 調査の方法

## ア 調査対象

A校 岐阜県内の市立定時制高校一年生

B校 岐阜県内の県立普通科の進学校三年生

A校には何らかの軽度障害や中学までの長期欠席経験があるなど、学習に困難を抱えている生徒が多い。B校の生徒は学習への意識が高く、半数が国立大学に進学する。いずれも小学校で光村図書出版の教科書で「スイミー」の学習経験がある。

イ サンプル数 各校二〇例。  
ウ 方法

① 光村図書出版小学二年生用教科書『こくご二上

たんぼぼ』より「スイミー」本文をA4用紙一枚で提示。分ち書き・漢字などは適宜訂正。

② 二〇〇字の縦書き原稿用紙に「あらすじ」を書くように口頭で指示。

③ 制限時間なし。読む時間も含めて五〇分間の授業の中で終了。

工 調査時期 二〇二〇年七月末から八月中旬。

## 三 「あらすじ」を研究素材にする理由

「あらすじ」の定義は、堀江(二〇〇六・八四―八五頁)に従って「文章や話の筋(展開)をまとめたもの」であり、「展開を中心としたまとめであり、流れに直接には関係しない場面や出来事は省略される。」とする。

文章表現力を考察する素材として「あらすじ」を使った理由は三点である。一つ目は、あらすじには元になる文章があることで、表現力の違いが表れ易いからである。二つ

目は「『あらすじ』は、話すこと、書くこと、聞くこと、読むことの四つの言語活動との組み合わせに柔軟性があり、多様な学習内容や学習活動を誘発する」松川(二〇〇一・二頁)ので、分析結果を今後の学習に生かせるからである。今回の分析を定時制高校での国語指導につなげたいという思いがある。そして三つ目は、「あらすじ」を書く力にはベースに読解力があり、読解を表現につなげていく過程を考察できるからである。

## 四 先行研究

筆者はかつて『「こんぎつね」のあらすじ調査をもとにした児童・生徒の言語発達に関する調査』に参加執筆した。これは小学校四年生から大学生までの一一一四名のサンプルを材料に、『あらすじ』をコアとした国語科カリキュラムの改善と開発を進めるために「現在の児童・生徒の『あらすじ』をまとめる力の実態を縦断的に調査し」松川(二〇〇一・二頁)のものである。今回はこれを所々参考にしており、以後は『「こんぎつね」と表記する。

## 五 分析

## (一) 「スイミー」のあらすじについて

「スイミー」は全文八〇〇字程度と短く、時間の経過に従って物語が進められているので、あらすじのほとんどの部分は、本文を順番に抜き出すことで完成する。例えば以下のようである。

## 抜き出し例

① 広い海に小さな魚の兄弟たちが楽しく暮らしていた。  
② みんな赤い中で一匹だけ真っ黒で泳ぐのは速いスイミー。  
③ ある日、まぐろに赤い魚たちは飲み込まれ、逃げたのはスイミーだけ。  
④ スイミーは悲しんだが元気をとりもどし、⑤自分とそっくりの小さな赤い魚の兄弟たちを見つけた。  
⑥ スイミーはいろいろ考えて作戦を提案した。  
⑦ みんなで大きな魚のふりをして泳ぐ。  
⑧ 練習をしてできるようになった時、①スイミーが目になり大きな魚を追い出した。(一九九字)

本文の抜き出しで表現できないのは、⑥スイミーはいろいろ考えて作戦を提案した。⑦みんなで大きな魚のふりをして泳ぐ。⑧練習をしてできるようになった時の三か所である。この三か所は、全体の字数制限を考えれば、抜き出しではなく、自分の語彙で上手にまとめなければならぬ。⑥と⑧に該当する本文は「⑥だけど、いつまでもそこにじっとしているわけにはいかないよ。なんとか考えなくちゃ。」スイミーは考えた。いろいろ考えた。うんと考えた。それから、とつぜん、スイミーはさげんだ。「そうだ。みんないっしょにおよぐんだ。海でいちばん大きな魚のふりをして。」で一二三字と長い。特に「提案」の内容はそのまま抜き出すと会話文の引用になってしまい、バランス

が悪くなる。工夫が必要な箇所である。

また「④練習をしてできるようになった時、」は、直接書かれていない表現を本文の記述から読み取ることが必要な難しい箇所である。この本文は「スイミーは教えた。けつして、はなればなれにならないこと。みんな、もちばをまもること。みんなが、一ぴぎの大きな魚みたいにおよげるようになったとき、」で、スイミーたちの練習については直接記述されていない。「はなればなれにならず、持ち場を守るように」という泳ぎ方の指示と「みんなが一ぴぎの大きな魚みたいにおよげるようになったとき、」という表現から、提案→練習→完成という流れがあったことを読み取ることが必要である。

(二) 二校を比較して

生徒たちの書いたあらすじには、二校間に違いのないことと、多少の違いのあること、そして違いのあることの三種類に分類できた。

① 二校間に違いのないこと

○ 冒頭の設定を書くこと

作品の冒頭は「広い海のどこかに、小さな魚のきょうだいたちが、楽しくくらしていた。」であり、場面設定と当初の状況説明が書かれている。

場面設定については、「広い海のどこか」という抜き出しだけでなく、「ある所」などの言い換えも含めれば、表1のように、二校とも七〇%以上が記述している。この作が時について書いていた。」前述した場面設定や状況説明と併せて、『こんぎつね』との相似性が感じられるデータとなった。

○ 場面転換の意識があること

●抜き出し例「◎ある日、まぐろに赤い魚たちは飲み込まれ、後略」●本文「ある日、おそろしいまぐろが、おなかをすかせて、すごいはやさでミサイルみたいにつっこんできた。後略」

この部分で、「ある日」を入れている例は、A校一七例、B校一八例と近い値である。好学社版の絵本『スイミー』では「ところが あるひ おそろしい まぐろが」と「ある日」の前に「ところが」という転換の接続詞が入っている。調査の提示文章にはないにもかかわらず、ここでの場面転換を意識して「ある日」を抜き出している例が二校似通った数であった。場面意識の定着は高いということである。

○ 本文の時間軸に従うこと

高木(二〇〇六・六八頁)は、要旨のまとめ方を、次のような三段階に分けている。「①文章中の用語をそのまま用いて、文章全体を短く言い換えたもの。②文章全体の文意を損なわないよう、中心となる内容をまとめて直したもの。③読み手が自分なりに読み取った文章の内容を、再構成してまとめ直したもの。」要旨とあらすじは定義が違うが、今回の調査では、時間軸によらないで再構成した例は

品は、舞台が「広い海」であるからこそ、まぐろと小魚たちとの駆け引きがダイナミックに感じられるのである。「広い海」は場面設定のキーワードとも言えるが、「広い海のどこか」「広い海」と記述している数はA校一一例、B校一二例と似通った数値となった。

表 1

	A校	B校
①広い海のどこか	4	7
②広い海	7	5
③海	1	3
④ある所	2	0
場所設定なし	6	5
場所設定ありの割合 (%)	70	75

また、状況説明の「楽しく」「暮らしていた」という二つの要素は、A校、B校ともにそれぞれ五例、九例と同数であった。

表 2

	A校	B校
①楽しく	5	5
②暮らしていた	9	9

場面設定や状況説明については、本文冒頭に示されていれば二校とも書くことができると考えてよいだろう。

○ 主人公の名前を書くこと

作品名でもあり、主人公の名前でもあるスイミーは、A校で一九例、B校は全員の二〇例に記述があった。

牧(二〇〇一・四七頁)は、あらすじの書き出しに、人物・時・場所の三要素をどの程度記述しているかを次のように分析している。「児童・生徒の一〇〇%が『こんぎつね』を示す人物を記述し、八一%が場所について、五八%二校ともに一例もなかった。

再構成に向かう年齢は「物語の時間軸を引いて書くあらすじ(小・中)」と書き手による表現軸を持ったあらすじ(高校・大学)「牧(二〇〇一・一三三頁)」と、高校・大学だとする見方もある。作品が長ければ違ったデータになった可能性がある。

② 二校間で多少の違いがあること

○ 本文からの抜き出しの割合

本文からの程度抜き出ししているかを「WebClass類似レポート検知ソフト」によって検証してみた。このソフトは、提出されたサンプルと基準との類似性を、単語と文節の重なりを比較することで測るものである。類似の割合は表3のようである。抜き出し例を基準に考えると、A校は九三・五%、B校は八八・三%と若干差が出ている。

表 3

	抜き出し例	A校	B校
本文を100とした場合の類似の割合 (%)	24.8	23.2	21.9
「抜き出し例」を100とした時の割合 (%)	100	93.5	88.3

あらすじには、学習に困難を抱えている層ほど抜き出した言葉を使い、そうでない層は自分の語彙で記述するということは想像できることではある。『こんぎつね』の中で、「中学二年までに第一段階の読みの深まりがあり、それはまた、高校生あたりで自分の言葉で再構成して表現するという第二段階での成長がある。」宮武(二〇〇一・二二六頁)

と分析したように、本来は自分の語彙で記述する高校生の時期に、A校ではそれができていない者が多いということになる。

○ 本文にないことを記述すること

● 抜き出し例「④練習をしてできるだけようになった時、」  
● 本文「スイミーは教えた。けっして、はなればなれにならないこと。みんな、もちばをまもること。みんなが、一ぴぎの大きな魚みたいにおよげるようになったとき、」

ここでは、練習を繰り返したことは明確には書かれていないが、「できるだけようになった時」という表現から、練習期間を経てできるようになったと読む必要がある。

「練習」については、二校とも記述しているものが一例ずつしかなかった。しかも明確な表現とは言い難い、A校「大きな魚のふりが出来るようになると」、B校「そこで皆で一匹の海で一番大きい魚になりきり」である。本文中に明確な記述のない部分を、あらずじとして必要な要素だと見極めるには深い読解力が求められる。本文に書かれていないことであらずじには必要な要素をどう理解させるのかは、学習に困難さを感じていない層にも課題である。

③ 二校間で違いのあること

○ 文字数

文字数の平均値はA校一七五・一字、B校一九五・八字である。制限字数より一割少ない一八〇字以下は、A校で九例、B校で一例と大きく差がある。A校では半数近くが

表 5

	A校	B校
①考えた	8	7
②提案した	3	4
③作戦の内容	13	18

小さな魚が集まって、大きな魚のふりをして泳ぐというスイミーの作戦の内容は、この話の要とも言え、これを書いていくかどうかは読む力に関係することである。二校間でこの部分に差が出たということは、学習に困難さを抱えている層には、特に要点を意識して読む指導に時間をかける必要があることを示唆している。

○ あらずじに不必要な部分を見極めること

● 抜き出し例「◎ある日、まぐろに赤い魚たちは飲み込まれ、逃げたのはスイミーだけ。」● 本文「ある日、おそろしいまぐろが、おなかをすかせて、すごいはやさでミサイルみたくにつっこんできた。一口で、まぐろは、小さな赤い魚たちを、一ぴぎのこらずのみこんだ。」

この部分で、A校の「ある日まぐろにスイミーがいきょうだいたちが食べられてしまった」、B校の「ある日、まぐろによってスイミー以外は食べられてしまった」のように「ある日」「まぐろ」「スイミー以外(赤い魚すべて、スイミーの兄弟すべて)」「飲み込まれた」という語句が過不足なく書かれているものは、A校には四例だがB校では八例あり、明らかにA校の方が少ない。

そして問題なのは、あらずじに不必要な語句まで抜き出してしまいう例である。例えばA校の「ある日おそろしいまぐろが、すごいはやさでつっこんできた。一口でまぐろは

制限字数の九割まで書けていない。しかも、最低文字数は、B校では一七七字と九割に近いが、A校では一一一字と制限字数の半分程度である。調査では、十分な時間が与えられていたので、時間不足で書けなかったわけではない。

表 4

	A校	B校
平均文字数	175.1	195.8
180字以下の例	9	1
最低文字数	111	177

A校では、制限の字数に合わせて書くということが一つの課題であることはこからうかがわれる。

○ 抜き出しでは書けない部分を必要だと認識すること  
● 抜き出し例「Fスイミーはいろいろ考えて作戦を提案した。◎みんなで大きな魚のふりをして泳ぐ。」

この部分には、①考えた②提案した③作戦の内容という三つの要素が含まれている。この三要素が、どの程度書かれているかの数が表5である。

これによれば、①考えた②提案したには大きな差が見られないが、③作戦の内容の数値については有意差がある。B校で「作戦の内容」を書いていないのは、「スイミーの運命やいかに……」で完結しているものと、「小さな魚がいた。く黒かった。くしまった。くだけだった。く泳いでいった。く見つける。」(傍線筆者)と文章末の一文だけを現在形にして、その後の展開を故意に書かなかったものの二つだけである。つまり、あらずじを結末まで書いているものは、残らず作戦の内容に言及しているものである。

小さな赤いさかなたちを、一ぴぎのこらずのみこんだ。」である。「おそろしい」「すごいはやさで」などの修飾語はこの部分にはなくてもよい。あらずじに必要性の低い語句を見極める指導が求められる。

○ 簡潔に説明すること

● 抜き出し例「Bみんな赤い中で一匹だけ真っ黒で泳ぐのは速いスイミー。」● 本文「みんな赤いのに、一ぴぎだけは、からす貝よりもまっくら。およぐのは、だれよりもはやかった。名前はスイミー。」

スイミーの説明として必要な三要素のうち、「真っ黒」は最後にスイミーが目の役割をするための伏線のキーワードである。表6を見る限り、二校ともキーワードとの認識があると考えられる。

大きく違うのは表現の仕方である。例えばA校の「一ぴぎだけからす貝よりも真っ黒だった。しかし、スイミーはだれよりも速かった。」「きょうだいたちがいて他は赤だが、一ぴぎだけはまっくら。泳ぐの速いスイミー。」という二例とB校の「スイミーという名前の、真っ黒で誰よりも泳ぐのが速い魚がいた。」の違いである。この三例はいずれも三要素を全て記述しているが、B校の例は一文でまとめられたスマートで読みやすい表現である。それに比べて、A校の二つの例は重要語句の

表 6

	A校	B校
①スイミー	19	20
②真っ黒	18	18
③泳ぐのが速い	7	10

抜き出しはできているものの、簡潔にまとめているとは言い難い。あらずしとして必要な要素との認識はできても、それを表現する力に不足があると言える。学習に困難さを抱える者にとっては、表現する力の中でも、簡潔に説明する力が課題になっていると感じられる例である。

#### ○ 漢語・上位語・慣用的表現の使用

●抜き出し例「①スイミーは悲しんだが「後略」●本文「スイミーはおよいだ、くらい海のそこを。こわかった。さびしかった。とても悲しかった。」

ここは、仲間を失って一人ぼっちになったスイミーの寂しさが平易な和語で繰り返し書かれている部分である。二校間には語句の選び方に大きな違いが見られた。

表7のように本文中の三つの語句「怖い」「寂しい」「悲しい」以外を用いている例はB校の方がかなり多い。慣用句や複合語などは「悲しい」についてだけでも、B校には「悲しみに暮れる」は三例、「悲しみを抱く」「悲しい思い」はそれぞれ一

例ずつあったが、A校では一例も見られなかった。「怖い」に関しては、B校には「恐怖心を抱えながら」がある。B校では慣用句や複合語を抵抗なく使う例が多く、A校ではそうではないようである。

またB校では「孤独」一例、「恐怖」三例など「怖い・寂しい・悲しい」の意味を含ん

表 7

	A校	B校
怖い・寂しい・悲しい以外の語句を使用した例	2	11

だ漢語や上位語を用いた例があった。漢語や上位語については、前述したスイミーの説明部分でも、B校の「仲間とは異なる個性の魚。名前はスイミー。」と、名前以外の二つの要素を「個性」という漢語の上位語で置き換えている例もあった。個性の違う魚が活躍するという「スイミー」の作品理解の一端を見ることができると表現である。漢語については、その他の部分でも、B校には容姿・協力・空腹・捕食・秘宝・逃避・共有・危険・運命・恐怖・恐怖心・対抗などの使用が目立つが、A校では合体・成功・協力・提案・対策の五例のみである。

この部分の和語での言い換えは、B校では本文の表現にはない、「沈んでいた心」「つらい」の二例がある。A校で「落ち込む」が二例あったが、「落ち込む」は話し言葉の中でよく使われる言葉であり、書き言葉への言い換えを知らない可能性もある。話し言葉を書き言葉の表現に置き換える指導が必要なかもしれない。

学習指導要領では、抽象的な概念を表す語句や、類義語・対義語を理解するのは中学二年生に、また、慣用句・和語・漢語・外来語などの指導は中学三年生にそれぞれ位置付けられている。読みと表現は相互に補完して成立するものである。前述したように中学二年までに読みの深まりがあるとすれば、漢語や上位語は、読みを的確に豊かに表現するための重要な指導事項となる。中学二年三年は語彙を増やす指導に重点を置くべき時期だと考えられる。

## 六 学習活動の提案

これまでの分析によって、あらずしの完成段階には、①本文の内容が最後まで書いていないもの、②本文の語句を用いて全体を短くしたもの、③本文の要素は失わずに自分の語彙を使ってまとめたもの、の三つがあると考えられる。さらにもう少し長い文章のあらずしでは④本文を再構成して自分の語彙でまとめたもの、という高度な段階があるだろう。

高校生では③のように、本文からあらずしに必要な要素を抜き出す読解力を持ち、抜き出せない部分は自分の語彙で上手に説明する表現力を持たせたいところである。できれば、中学二年三年で、語彙を増やすために時間をかけた個別指導をするのが一番望ましい。能力別クラス編成は他の教科に比べて、国語では進んでいないように感じられるが、今回のデータを見る限り、国語にこそ必要なのかもしれない。しかし、それが望めない現状を考えると、高校生からの学び直しに期待することになる。

そこで、高校で学習に困難さを抱えている層には次のような学習を繰り返し行うことを提案したい。

#### ① 大事な要素を抜き出す力をつける学習活動

- ・ 短い文学的な文章を読んで、あらずしの要になる部分を抜き出す。
- ・ 新聞の事件記事を用いて、その中での重要事項を三点程度にまとめる。

- ② 簡潔に説明する力をつける学習活動
  - ・ 一〇〇字程度の文章に見出しをつける。
  - ・ 具体的なものを一文で説明する。
- ③ 語彙を増やすための学習活動
  - ・ 辞書の説明を示してそれに当てる語句を考える。
  - ・ 和語を漢語に、下位語を上位語にする。

#### 七 おわりに

文章表現力は国語の授業だけで育つわけではない。日常の言葉の指導の中で育っていく部分も多い。国語教師は言葉の指導の中心に置くことを意識して、生徒たちの日常生活に生きる言語指導を常に心掛けたい。

#### 引用文献

- (堀江二〇〇六)『国語教育指導用語辞典第三版』田近洵一・井上尚美編 教育出版、「要約」堀江祐爾 二〇〇六年二月二日
- (松川二〇〇一)『「んぎつね」のあらずし調査をもとにした児童・生徒の言語発達に関する調査』国語科教育研究会編二〇〇一年九月二六日 国語科教育研究会編、「調査の目的と方法」松川利広 二〇〇一年九月二六日
- (牧二〇〇一) 松川二〇〇一と同じ。「書きはじめと結び」牧恵子 二〇〇一年九月二六日
- (高木二〇〇六) 堀江二〇〇六と同じ。「要点・要旨」高木展郎 二〇〇六年二月二日
- (牧二〇〇一) 松川二〇〇一と同じ。「調査を終えて」牧恵子 二〇〇一年九月二六日
- (宮武二〇〇一) 松川二〇〇一と同じ。「第6場面うたれたごん」宮武里衣 二〇〇一年九月二六日